



大崎耕土に広がる水田 大崎の米づくり

大崎耕土は、大崎地域を貫く江合川、鳴瀬川の流域に広がる湿地や原野が、地域の人々の長年の努力により生まれ変わった、水田が広がる米づくりに適した豊穡の土地です。

大崎地域では、洪水や濁水が頻繁に起こり、また、「やませ」による冷害や台風など、厳しい自然環境の中、大崎の人々は用排水路やため池、ぬるめ水路などの水管理施設と「契約講」を基盤とする水管理組織からなる「巧みな水管理システム」を構築し、全国屈指の米どころ大崎耕土を創りあげてきました。

この「大崎耕土」と呼ばれる当地域の水田では、水稻の作付面積が約1万8千haと県内の作付面積の約28%を占めています。地元の古川農業試験場で育成された良食味品種「ササニシキ」や「ひとめぼれ」などが栽培されています。

近年、消費者の食の好みが多様化する中で、県は“米どころ宮城の復権”を目指し「みやぎ米ブランド化戦略」を策定し、『お米は食べわける時代。だから、みやぎ米。』をキャッチフレーズに、「ひとめぼれ」、「ササニシキ」を主力に、これも古川農業試験場で育成された新品種「だて正夢」と玄米食向け品種「金のいぶき」を加えた4つの品種をラインナップし、消費者の食卓シーンに合わせた銘柄選びを可能として多様化する消費者の好みに対応するなど、みやぎ米のさらなるブランド力向上を進めています。

また、食の安全・安心や生物多様性の重要性が認識されている中、大崎地域では、水田が持つ生態系機能を活かした害虫管理等による環境保全米の生産など、環境にやさしい農業が盛んに展開されており、「みやぎの環境にやさしい農産物認証・表示制度」による生産登録面積は約700ha、土づくりの実践と化学肥料や化学合成農薬の低減に一体的に取り組む農業者(呼称:エコファーマー)の認定者数は約1千人とそれぞれ県の約3割を占めています。

(参考資料：宮城県)